

## ゆりかご保育園―右京区花園町

# わたしの京都

河野裕子

一昨年の夏に息子の家に子どもが生まれた。生まれる前から男の子だと分かっていたから、男の子の名前をいろいろ考えた。初めのうちは、あれこれ名前を考えては、ワイワイ楽しんでいたが、そのうちだんだん飽きてきて、親のほうも、何でもええ、何か考えてと言いだす始末。出生届け締め切りの日に、「権」届けを出した。

その権が、今年の春から保育園に通うことになり、親たちにくつついてわたしたちも入園式に出席してみた。俺もあんな保育園に行ってみたい、風の又三郎の教室みたいな所やと息子が言うのを聞いてむしろに行きたくなったのである。

松ヶ崎保育園という。京都五山の送り火のひとつ、松ヶ崎の「妙法」が点火される山の麓にあるが、「法」のほうにより近い。涌泉寺という日蓮宗のお寺が経営している。入園

式の日には満開の桜が散り始める中を、黄色い蝶が飛び、出来すぎた絵のような日になった。

小さな教室、木の廊下、白雪姫のこびとたちが使うような椅子と机。木のげた箱もある。こんな保育園がまだあったのかとビックリ。昭和二十年代から三十年代ころに逆戻りしたような雰囲気である。

権は一歳半。入園者の中では、いちばん年少である。小さい組は、さくら組。さくら組と聞いてしみじみとこみあげる感慨があった。うちの二人の子どもたちも保育園育ちで、上の子が確かさくら組だった。下の子は、もも組だったような気がする。襖を開けて隣の部屋をのぞけば、四歳と二歳の子どもたちが、おもちゃ箱をひっくり返して遊んでいるような気がするのに、なんとひと飛びにこんなに速く時間が過ぎてしまったことだろう。

うちの子どもたちが通ったのは、ゆりかご

保育園だった。この保育園もお寺が経営していた。右京区・妙心寺の塔頭の中にあり、やはり木の廊下と、小さないくつもの教室と、げた箱があった。松ヶ崎保育園を見たときひどく懐かしい気がしたのは、ゆりかご保育園の記憶があったからだろう。

園の入り口の横に池があり、夏の初めにはモリアオガエルがしろいおおきな泡の卵をカエデの木にたらしっていた。園庭の端の梅の木のおねもとに、冬は灰がていねいに撒いてあった。昔からのお寺の暮らしの一端が、そういう何でもないところから感じられた。

朝は永田がバイクの前と後ろに一人ずつ乗せてつれて行き、帰りはわたしが乳母車を押して迎えに行った。毎朝別れるとき子どもに泣かれて困ったといまだに永田が言う。よほど辛かったにちがいない。園からの毎日のお便りに、「紅ちゃん、ぬいぐるみのパンダ

を抱っこして立ったままお昼ねをしました」と書かれていたときは、子どもの寂しさがこたえた。家からはじめて離された紅には、身内はそのパンダだけだったのである。紅はまだ二歳になつていなかったと思う。

保育園でいろいろな親御さんや子どもたちに会えたことがわたしを励ましてくれた。三人の子をバイクの前と後ろに一人ずつ、もう一人はおんぶして通っているお母さんもあつたし、こころや身体に障害のある子どもも何人か居た。どしゃぶりの雨の中をバイクごと雨がっぱをかぶつたようにして、お父さんと子どもが三人でやって来た朝のことが忘れられない。バイクから湯気がたち、子どもたちは父親にしがみつき、父親は寡黙で迫力があつた。だれもが、手のかかる幼児を抱えて暮らしに必死だつた。

わが家も例外でなく、大学に戻つたものの、

永田は無給の研修員という不安定な身分である。生活のために夜は塾の講師をしていた。わたしは、しばらく外に出て働いてみたが、子どもがかわりばんこに熱を出す。欠勤がちになり勤め先に申し訳がない。家でできる仕事をさがして、福武書店の赤ペン先生のアルバイトにありつけた。高校、大学受験生のための採点や添削、ワンポイントアドバイスをするのである。昭和五十年代の初めのころのこと、一枚を仕上げると、二十円とか三十円になる。林檎りんごひとつ買うのにも、添削何枚

分かなど、つい換算してしまう癖がいつのまにかついて、約つましい暮らしたはずだが、ふしぎにアッケラカンとしていたと思うのは、あとからつけた感想なのかもしれない。

ゆりかご保育園はたのしかった。真冬でも半袖、半ズボン、はだしの園生活を実施していたが、子どもたちはそれで風邪をひくとい

うこともなかった。広い園庭に夏の陽がてり、ホースの水が光り、一日かかって泥まんじゅうを作っている子どももいた。それは、実にほれぼれとうつくしかったのである。

子どもたちとの幼年時代は、はかないほど速く過ぎていつてしまった。両手にいつも子どもたちの手があり、子ども特有の土埃つちまきのまじつたような汗の匂いに包まれていた日々。幼児は毎日、変化してゆく。そのおもしろさ。幼年時代を、子ども二人分生きなおしている自分を味わうのが新鮮だつた。

この八月のおわりに、權は二歳になつた。わたしは、こんな歌を作つた。

歳月は巡り来るなり児童書の本棚にさがす厚紙の絵本

(かわの・ゆうこ「塔」選者)